

<p>芸術・スポーツ</p>	<p>【代表的な研究テーマ】 □ アートを核にしたコミュニケーションの現代的展開 ～アール・ブリュットからワークショップまで～</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 現代美術 ■ ワークショップ ■ アール・ブリュット ■ アウトサイダー・アート ■ 考現学 ■ 超芸術トマソン 	<p>一途とは言い難い雑多な経験から、これまでの滋賀大での二十年間、“アート”を、そしてアートと教育をつなぐ“美術教育”を私なりに模索する中で、私が直感的に興味を覚えて取り組んできたのは以下の3つです。</p> <p>I : 身体を表層をモチーフにした造形表現 II : アール・ブリュット(アウトサイダー・アート)及び考現学の調査研究 III : アートを通じたワークショップの模索</p>
	<p>I の造形表現は一個人、一作り手としての表現活動で、塑像の製法に起因する本体(身体)と型(時空間)の関係が生み出す“表層”が気になって、発表未発表によらず学生時代からずっとやっていることです。「Hollow Face 錯視」を伴う凹面のキューピー人形や仏陀マスクの型を壁状に並べてインスタレーション、ロダンの名作『考える人』を題材にその背中を量産しスタッキング(積重ね)など、私たちの世界の表層が纏う「表と裏」「物体に潜む隠れた形」の視覚化を試みています。そこに出現する形は、実は私たちが視覚的には見えていないけれども、それを感じているカタチなのだと思っています。</p>
<p>藤田 マサヒロ Masahiro Fujita</p>	<p>II のアール・ブリュットへの関わりも、学生時代から続いています。設立から関わってきたボーダレスアートミュージアムNO-MA(近江八幡市)の企画運営への助言や、その企画展への作家としての出品などをしながら、ずっと関わっています。近江学園以降、滋賀県内で広がった先駆的な障害者の造形活動への注目もあり、この十年で広く認知されるようになったアール・ブリュットですが、それだけでなく、世界各地の幼児の造形や民俗学、「考現学」「超芸術トマソン」などの造形行為の諸相にも着目し、アートの根源を考えて美術教育を再定義したいと考えています。</p>
<p>教育学部 教授</p>	<p>III のワークショップの模索は、アートを介して人と人とが繋がる、いわば学校を抜け出した美術教育です。大学の授業で始めた「大学生の造形遊び」が、自分の楽しみ、自分の発見を経て、他者の喜びや発見に形を変えて広がってきました。例えば似顔絵のワークショップ - お客さんにもこちらを描いてもらう似顔絵の描き合いは、数年前にゼミ生らとの協働から生まれました。単に造形活動や作品を子どもや大人へ一方的に提供する“プログラム”ではなく、造形活動や作品によって参加者がアフォードされて、新たなコミュニケーションを企画者と参加者が生成する、それが学校教育とは区別されるべきワークショップでの美術教育ではないかと考えます。</p>
<p>【専門分野】 ・立体造形 ・アール・ブリュット ・ワークショップ</p>	<p>一見、つながりなく見えるこの3つのキーワードですが、着任以来、“彫刻”の入門として授業で、あるいは学外の講習で取組んでいる『目隠し彫刻』(目隠して視覚を遮り、他の感覚を駆使して粘土で造形するというもの)には、これらの3つの要素がどこかで深く繋がっていると今更ながら感じます。また、イラストレーターSEOとのコラボで始めた『Green chan Project』(緑の好きなグリーンちゃんミドリグマを主人公に様々なストーリーを持たせて展開するもの)を展覧会に出展したり、『学校アート化計画』で学校園に出前展示する中で、観覧者の子どもや大人たちが見せる様々な反応からプロジェクトが次のステップへ発展していることも、これらの3つの要素と繋がっています。私にとって“アート”というフィールドは、学生や観覧者に留まらず多くの人々の中で、コミュニケーションが連鎖的に発生していく場だと考えます。アートを核にしたコミュニケーションの展開やその意味を、教育の側面からも検証し、その“場”に人々を意識的に巻き込み続けていきたいと思っています。</p>
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●アーバナー#7『マンホールシリーズ 都市の皮膚』(’98) ●天理ビエンナーレ『house』(’99) ●ボーダレスアートミュージアム NO-MA設立運営(’02～) ●越後妻有トリエンナーレ『お祝い隊』(’03) ●滋賀医科大学小児病棟壁画『瀬田の森』(’09) ●芸術版楽市楽座アート in 長浜『Happy Make』(’09) ●『エガオ絵や』(’10～’14) ●滋賀大産業共同研究センター報#9『アートの力』(’10) ●個展『表層はカタチを纏っている』(’12)『ひそむカタチ 考える人考』(’13)『Green chan Project 緑をさがして』(’14)『表層天国』(’20) ●BIWAKO ビエンナーレ『Stacking His Backs』(’14)『微笑みの壁 4×9 8×9』(’18) ●日韓現代芸術交流展『不思議の国のグリーンちゃん』(’16)『緑の言の葉』(’19) ●守山市民ホール現代への視点『ある日、森の中クマさんに出会った。』(’16) ●日タイ現代美術展『微笑みの壁』(’17) ●Shiga U Arte『書、造形と言葉の綾なす世界』(’19) 	    <p>写真: 左より BIWAKO ビエンナーレ 展示 / 個展『考える人考』DM / Green chan Project in 附属小学校 / 「目隠し彫刻」授業風景</p> <p>企業・自治体へのメッセージ</p> <p>コロナ禍で生活やアートを取り巻く状況が大きく変わりつつあります。場や素材、経験を共有するライブの意味を改めて問い直す必要があります。ワークショップや講演とは違う、新たなアートを模索する異分野交流・異種格闘技的共同研究を希望します。パフォーマンスとのコラボやアートイベントの企画参加、フィギュアの商品の開発 等</p>